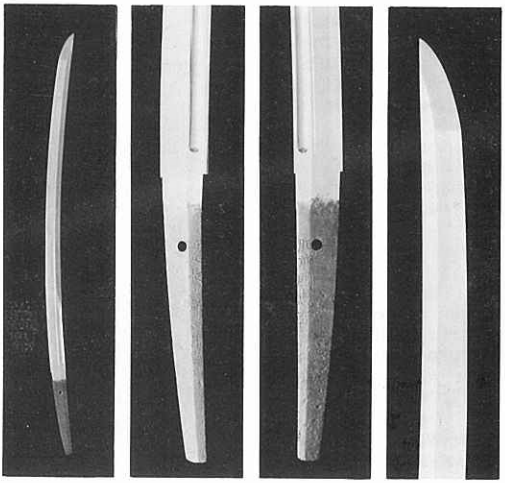
No.25

博物館報

―肥前名刀展特集号―



初代忠吉刀　銘　肥前国忠吉　慶長5年8月日

長さ68.7cm、反り 1.8cm表裏に雄刀樋があり、冠落造りである。真の棟で、比較的に広い身幅で大鋒、強い造りこみで姿がきわめて優美である。小杢目に大肌まじりの地鉄で、刃文は浅いのたれで、ところどころ大互の目がかっている。全面的に荒沸えまじりで、ところどころに刃縁に地沸がからんでいる。匂は先にいくほど深くなっている。帽子は大丸で砂流しがかっている。中心尻は浅い栗尻で幾分勝手さがりの鑢目である。

初代忠吉は、元亀3年（1572）生れ、竜造寺家の抱工であった橋本道弘の子として生まれ、慶長元年（1596）24才の時、京都にでて埋忠明寿の門に入り、慶長3年（1598、26才）佐賀に帰り鍋島藩の抱工として城下長瀬町に住んだ。以来大いに作刀に励み忠吉一門の祖と称された。

この刀は数少ないものの一つで年紀のあるものの中では一番古く、忠吉28才時の作刀である。若さと覇気がみなぎっており、忠吉の作風、作歴をしるうえでも極めて貴重なものである。

なお忠吉は元和10年（1624）武蔵大掾を受領、名を忠広と改めた。寛永9年（1632）61才で没した。

目次

・初代忠吉刀　肥前国忠吉 ――1
・「肥前名刀展」紹介 ―― 2～11
・日誌・行事のお知らせ ――12

特別企画展

肥 前 名 刀 展

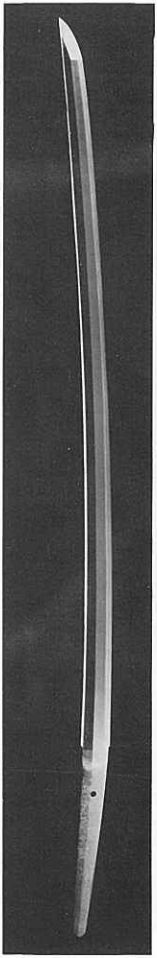
主旨　日本刀は、もともと武器としてつくられたことはいうまでもないが、時代の推移とともにその役割も大きくかわり、現在では美術工芸品として愛好され、鍛鉄のすぐれた文化財として新しい生命を持ち続けている。

肥前では、江戸時代の初めから刀工忠吉一家及びその門人によって、数多くの名刀が作られてきた。これらの肥前刀は、新刀としてつくりが豪壮で、実戦的なものとして尊ばれ、刀剣史上すぐれたものとして高く評価されている。そして独自な風格高い作風は、見るものの魂にせまってくる凛々しさを持っている。

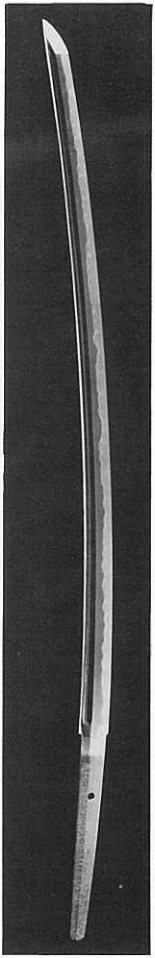
当館では、肥前忠吉各代の作刀を初め、その門人が生んだ数々の名刀と、それに付属する鐔、小道具類及び文献等を一堂に展観し、肥前刀のもつすぐれた芸術性を追するとともに、刀剣に対する理解と認識を深めようとするものである。

主　催　　佐賀県立博物館
後　援　　佐賀県刀剣会
会　場　　佐賀市城内１丁目15番23号
　　佐賀県立博物館　大展示室
会　期　　昭和50年３月２日～３月23日
　　（９時から16時30分）　会期中無休
観覧料　　大人　大人　　大・高生　中・小生
　　個人　100円　　50円　　30円
　　団体　80円　　40円　　20円
講演会　　日　時　昭和50年３月15日（土）午後１時30
　　会　場　佐賀県立図書館講堂
　　演　題　「肥前の刀と鐔」
　　講　師　刀剣研究家　福永酔剣氏

鉄地木瓜形高肉彫雲竜図　肥州矢上住光廣



初代忠吉刀
銘　肥前国忠吉



４代忠吉刀
銘　肥前国住近江大掾
藤原忠吉

肥前名刀展出品目録

(1)刀　剣

(番号)	(種別)	(銘)	(長さ)	(備考)
・古刀				
1	長巻	正平十〇肥州末貞	62.6	
・新刀・新々刀				
1	刀	肥前国忠吉	75.2	1忠吉
2	刀	肥前国忠吉 慶長五年八月吉日	68.7	〃
3	刀	肥前国忠吉 慶長六年八月吉日	67.9	〃
4	刀	肥前国忠吉	65.2	〃
5	刀	肥前国忠吉	73.0	〃
6	刀	肥前国忠吉	74.4	〃
7	刀	肥前国忠吉	74.5	〃
8	刀	肥前国忠吉　(重要美術品)	70.9	〃
9	刀	肥前国住人忠吉作 慶長廿年八月吉日	69.2	〃
10	脇差	肥前国住人忠吉作 慶長廿年八月吉日	35.0	〃
11	脇差	肥前国住忠吉 生年四十八歳之作	43.5	〃
12	脇差	肥忠吉 朝物藤原宗長（花押）	39.5	〃
13	刀	肥前住忠吉	73.9	〃
14	刀	肥前国佐賀住橋本新左衛門尉 忠吉作 元和七年八月吉日	72.9	〃
15	刀	肥前国住人源忠吉	72.1	〃
16	刀	肥前国住藤原忠広 寛永八年八月日 （佐賀県重要文化財）	75.6	〃
17	短刀	肥前国住藤原忠広（金象嵌）閑叟所持 寛永八年八月日 （佐賀県重要文化財）	29.6	〃
18	刀	肥前国住武蔵大掾藤原忠広 寛永八年二月吉日 （金象嵌）比刃露寛文五年十一月八日 三ツ胴裁断山野加右衛門六十八才永久 （花押）	72.3	〃
19	刀	武蔵大掾藤原忠広	68.5	〃
20	脇差	肥前国住橋本平作 二月吉日	37.6	2忠広
21	剣	肥前国住藤原忠広 寛永十三丙子白二月吉日	58.0	〃
22	短刀	肥前国住藤原忠広	29.3	〃
23	刀	肥前国住近江大掾藤原忠広 正保五年二月吉日	76.8	〃
24	刀	肥前国住近江大掾藤原忠広 万治元年八月吉日 願主肥前国住多久美作守藤原茂辰室氏女	72.2	2忠広
25	刀	肥前国住近江大掾藤原忠広	74.3	
26	脇差	近江大掾藤原忠広	56.6	〃
27	刀	肥前国住近江大掾藤原忠広 同国住人陸奥守忠吉	71.5	2忠広・3忠吉合作
28	脇差	近江大掾藤原忠広 肥前国陸奥守忠吉	53.3	〃
29	刀	肥前国住陸奥守忠吉	73.2	3忠吉
30	刀	肥前国住近江大掾藤原忠吉	71.6	4忠吉
31	脇差	近江守忠吉 宝暦八戊寅九月吉日奉納 鍋島阿波藤原茂訓	46.8	5忠吉
32	刀	肥前国住近江守忠吉	66.8	6忠吉
33	槍	肥前国住近江守忠吉 文化七庚午年八月吉日成松万 兵衛尉信久応需作之	11.5	〃
34	刀	肥前国近江守忠吉 同息橋本忠左衛門尉忠広 文化十一甲戌八月吉日	70.9	6忠吉・7忠広合作
35	刀	肥前国忠吉 天保十四年卯八月日 應成松氏之需	70.8	8忠吉
36	刀	肥前国新左衛門尉藤原忠吉 弘化丙午炑八月吉日作之	73.0	〃
37	脇差	新左エ門尉藤原忠吉 弘化丙午秋八月吉日	45.0	〃
38	短刀	肥前国忠吉 萬寿無彊	27.5	〃
39	刀	肥前国忠吉	75.1	9忠吉
40	脇差	肥前国忠吉	39.4	〃
41	刀	肥前国住人吉信	70.6	吉　信
42	脇差	肥前国土佐守藤原忠吉	31.6	土佐忠吉
43	短刀	源吉房	35.0	吉　房
44	短刀	切物藤原吉長	27.7	吉　長
45	脇差	肥前国河内大掾藤原正広	38.2	1正広
46	刀	肥前国河内守藤原正広	75.2	2正広
47	刀	肥前国河内守藤原正広	74.0	〃
48	刀	肥前国河内守藤原正広	69.3	〃
49	刀	（金象嵌）璃法印遺物為打黄金差添被領中 山氏直守 貞享弐年丑四月廿七日二ツ胴切落山野勘 十郎久英（花押） 肥前国河内守藤原正広	75.2	〃
50	脇差	肥前国河内守藤氏正広	62.2	〃
51	刀	肥前国正広	70.0	9正広
52	刀	肥前一文字出羽守行広阿闍陀鍛	75.0	1行広
53	刀	一肥前国出羽守藤原行広	70.6	2行広

元禄十六年八月吉日

54 脇差 肥前国一文字宗清 57.0 1行清
以真鍛造之

55 刀 肥前佐賀住国広 71.4 国 広

56 脇差 大和大掾藤原兼広 51.9 1兼広

57 刀 肥前国住遠江守藤原兼広 80.3 2兼広
青木氏藤原永英
享保三年八月吉日

58 刀 肥前国住藤原広真 71.9 2広真

59 刀 肥前国住藤原広定 71.5 広 定
以真鍛作之

60 刀 肥前国住人広則 70.5 1忠国

61 脇差 播磨大掾藤原忠国 52.3 〃

62 脇差 (抱牡丹文) 播磨守藤原忠国 56.1 2忠国
(16葉菊文) 天和三和二月吉日 以南蛮鉄作

63 刀 肥前国佐渡掾藤原宗平 69.4 1宗平

64 刀 肥前国住伊予掾源宗次 71.1 1宗次

65 刀 肥前国住源正次 69.3 2宗次

66 刀 肥前住源宗次鍛之試割鉄甲 69.5 3宗次

67 短刀 源宗次造之 23.1 8宗次
為古川雅友
慶應丁卯秋

68 刀 肥前国藤原吉包 73.6 吉 包
明治元年十一月日

69 脇差 唐津住高田河内守源本行 48.3 2本行
寛保三歳三月日

70 脇差 唐津住正景 39.5 正 景
文化十四年二月日

(現代刀)

1 刀 於東都肥前国忠次作之 70.2
昭和十七年仲秋 (多久 中尾三治郎)

2 刀 肥前国能古見住一吉作 71.2
昭和甲寅年二月吉日 (多久 中尾一吉)

3 刀 肥前国唐津住人正次作之 71.6
昭和四十七年九月吉日 (唐津 田口喜一)

4 短刀 肥前国正吉彫銅作 27.2
昭和五十年一月吉日 (唐津 田口庄一)

5 刀 肥前国白竜子忠孝作 75.9
昭和四十七年十一月日 (肥前町 井上慶昭)

6 刀 肥前国忠寿作 70.5
昭和五十年一月日 (肥前町 井上久)

7 刀 肥前国兼元 77.5
(佐賀 元村兼作)

8 刀 肥前国保則 72.3
昭和四十九年十一月 (佐賀 元村保廣)

9 刀 肥前国住保廣謹作 77.5
(川副町 元村保)

10 刀 肥前国住保次作 70.5
昭和四十七年六月吉日 (川副町 元村保秀)

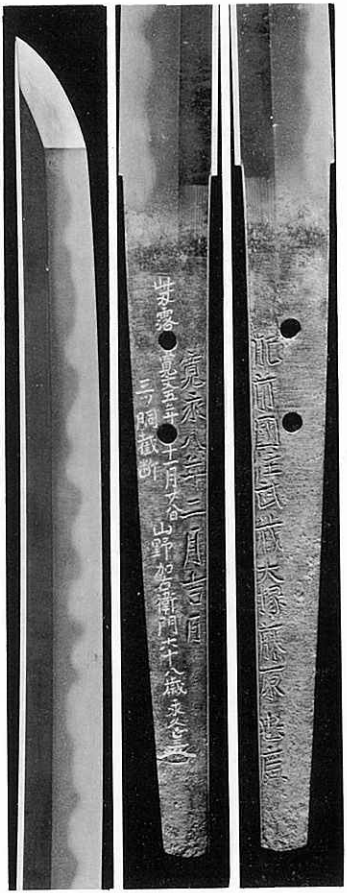
11 短刀 正廣 69.6
(川副町 野田初次)

(2)肥前鐔、小道具

・鐔

1 鉄地丸形鋤下彫日足文図 肥前吉信
2 鉄地八角形亀甲文図 肥州住忠清作
3 鉄地木瓜形肉彫象嵌雲竜図 肥前住忠真
4 鉄地八角形勘下肉彫古梅図 肥之前州忠長
5 鉄地丸形鋤彫雨竜図 肥前住忠長八十一茂鑽
6 鉄地丸形肉彫象嵌遠山橋図 肥州住広国
7 鉄地丸形肉彫象嵌旗軍配図 肥前国住勝貞作
8 鉄地丸形透海鼠図 河内守本行(裏)刀作人
9 鉄地丸形高肉彫色絵人物図 肥州住家廣
10 鉄地丸形肉彫色絵釣人秋景図 肥前住忠行
11 鉄地糸巻木瓜形勘下彫梵字図 近江守忠吉
12 鉄地木瓜形亀甲文図 肥州住勝貞作
13 鉄地丸形肉彫釣舟遠山図 肥前国住忠行
14 鉄地木瓜形肉彫亀甲文瓜図 肥前国住忠行(裏)天保十三八月日
15 鉄地丸形肉彫秋景図 肥前国忠行
16 鉄地木瓜形肉彫象嵌竜図 肥前住忠長
17 鉄地丸形銀覆輪糸透海草図 唐津住正国
18 鉄地丸形肉彫色絵養由基図 須古住釘本弥左(花押)
19 鉄地丸形打出雲竜図 行年七十二歳 肥前住勝貞作
20 鉄地丸形地透鳥居図 肥前住勝貞作
21 鉄地木瓜形透葉図 勝義
22 鉄地丸形高肉彫色絵人物図 肥州住家廣
23 鉄地丸形銀縄目覆輪肉彫色絵隠月涛図 肥器住家廣
24 鉄地丸形透松帆図 勝盈作
25 鉄地丸形地透松葉図 肥州住勝盈
26 鉄地変木瓜形透松図 肥州住勝常作
27 鉄地丸形肉彫茶道具図 肥州住勝常作
28 鉄地変四形肉彫象嵌月下兎図 勝常作
29 鉄地丸形無文 肥州住勝徴作(裏)享和二壬戌年
30 鉄地丸形肉彫波水鳥図 肥前国住致宜
31 鉄地変丸形肉彫色絵川辺秋草図 肥前国住致宜
32 鉄地丸形肉彫闌透図 唐津住正勝
33 鉄地撫四角杏目肌(大) 肥前国忠吉作
34 鉄地撫四角杏目肌(小) 肥前国忠吉作
35 鉄地丸形高肉彫地透鉈豆図(大) 肥州矢上住光広
36 鉄地丸形高肉彫地透鉈豆図(小) 肥州矢上住光広
37 赤銅磨地丸形片切彫色絵葡萄図 肥前唐津住直充
38 鉄地八角形鋤下肉彫雨竜図 肥前国住忠長
39 鉄地丸形鋤下彫雨竜図 肥前国住忠長作
40 鉄地長丸形高肉彫色絵波岩上猿図 肥州住家廣
41 鉄地丸形赤銅縄目覆輪高肉彫地透象嵌雲竜図 肥前国向井吉兵衛於武州江戸作是
42 鉄地浅木瓜形肉彫色絵波朝日図 慶応二丙寅仲秋

吉村一啓（花押）
43　鉄地木瓜形肉彫小透象嵌月下兎図　肥州住勝真作
44　鉄地丸形肉彫象嵌老松図　行年六十八子若道人（花押）
45　鉄地長丸形高肉彫色絵象嵌雲竜図　崎陽山人若芝
46　鉄地撫木瓜高肉彫竜図　肥前矢上住光賓
47　真鋳地丸形鋤下彫竜図（大）　平戸住国重
48　真鋳地丸形鋤下彫竜図（小）　平戸住国重
49　鉄地木瓜形高肉彫波兎図　諫早深山住常次
50　鉄地木瓜肉彫瓢箪図　肥州勝常
51　赤銅地丸形雲井透　唐津住光明（花押）
52　鉄地丸形縄目覆輪糸透　唐津住正勝
53　鉄地丸形杢目肌無地（大）　真了
54　鉄地丸形杢目肌無地（小）　真了
55　鉄地丸形唐草竜透図　南蛮鐔
56　真鋳地四辺折曲肉彫花文図　〃
57　鉄地長丸形象嵌南蛮船透図　〃
58　鉄地糸巻形平象嵌竜図　〃
・縁　頭
1　鉄地高肉彫色絵象嵌雲竜図　風情斉若芝
2　赤銅地高肉彫鐘馗鬼図　佐嘉住自流軒常延
3　鉄地高肉彫色絵象嵌雲竜図　肥州矢上住光広
・三所物
目貫　片切彫　秋草図丁卯秋日松園（花押）
小柄　肉彫色絵　網干に鷺図
笄　肉彫色絵　雲に雁図
（裏）雲まよふ夕の空のあま風にただとびわたる雁の一つら　松根
・拵金具　片切彫波千鳥図　吉村一啓
(3)文献
1　正広家代々刀工肖像図
2　忠吉家系図　斉藤高寿書　安永六年写
3　二代正広受領口宣案　万治三年
4　初代正広屋敷扶助料状寛永十四年
5　禁中様御太刀御注文　万治三年
6　注文状
7　河内守之扣緞
8　定
9　御城二而細工仕候次第　天和二年
10　刀脇差之注文
11　橋本謹一　橋本正広両家之書類　一冊
12　新刀弁　安永八年　鎌田三郎大夫著　九冊
13　その他
(4)写真・その他
1　作刀工程見本　9点
2　作刀工程写真　14点
3　忠吉家一門使用金床
4　行広家一門使用金床
5　行広家一門使用仕事台
6　行広家一門使用水舟（佐賀市真覚寺蔵）
7　行広家一門使用砥石（佐賀市真覚寺蔵）
8　初代忠吉墓地写真
9　忠吉家代々の墓地写真
10　その他



初代忠吉刀　銘　肥前国住武蔵大掾藤原忠広　寛永八年二月吉日（金象嵌）此刃露　寛文五年十一月八日　三ツ胴截断　山野加右衛門六十八歳永久（花押）

肥前の刀工たち

—肥前名刀展出品刀工紹介—

1．肥前の古刀期の刀工

肥前国の古刀期には、肥前刀といわれるような特色ある刀鍛治はいなかったが、鎌倉時代より室町時代にかけて、神埼、坊所、川上、塚崎（武雄）塩田、浜崎、諫早、大村、平戸等の地に豊後高田系、筑前の左文字一族、金剛兵衛、肥後の延寿系、薩摩波平系等の流れをくむ多くの刀工の交流がみられる。しかしこの人達の作品で今日残っているものは極めて少ない。

ここに出品の長巻の刀工末貞は塩田にきた末貞の二代目で、南北朝の初期塚崎住にいた（一説に薩摩波平系）刀工である。出来もよく地鉄は小板目肌で小乱れ調の直刃である。竜造寺隆信の佩刀と伝えられ、南朝の正平10年（1355）の年号とともに資料的にも貴重な一口である。

2．肥前の新刀・新々刀期の刀工

肥前刀といえば、普通新刀（慶長1596）以降の刀をさし、特に忠吉系の刀をさしている。桃山、江戸時代には、肥前の刀工忠吉一家とその門人による作刀が盛んになり各藩主の抱工となって、城下に住んで特別の保護を受け作刀に励んだ。

肥前刀はつくりが豪荘で実戦的なものとして尊ばれ、新刀の中でも姿、地肌、刃文いずれも最もすぐれたものとして高く評価され、刀剣史上でも、格調高いものの一つとして有名である。

●肥前刀の一般作風

姿　尋常な姿で反りは鳥居反り、品位高く鋒は中鋒が最も多い。桃山、江戸時代の他国の刀工にくらべ姿形が整って一番美しい。

種別は刀が最も多く、次に脇差で短刀、槍、薙刀は少ない。出来不出来のむらがなく平均していい作品が多い。

地鉄　細かくよくつんで美しい。地沸が一面にむらなくつき米粒をまいたように見えるので、肥前の糠目肌ともいわれている。又地肌は皮鉄が薄いため心鉄の染みが出たようにみえるのがあるが、これを肥前鉄といっている。これは鍛刀技法のすぐれたことをしめしている。

刃文　直刃、湾れ、丁子乱、互の目乱等種々あるがいずれの場合でも小沸が刃縁にむらなくつき匂深く、丁子乱の時は丁子の頭が丸く刃中に長い匂足が見事に入っている。これを肥前の足長丁子といっている。また、焼の谷に小沸、匂が深々とつくのが肥前刀の特色である。

鋩子　尋常な小沸で深く、直に小丸に反えるのが多い。横手筋上より切先尖端まで一定した焼巾で、尋常に焼くのが特色で、これを肥前鋩子といっている。

彫物　種々あるが竜の類が多く、みな上手で様式が山城の理忠風で初期のものは美事である。自身彫は殆んどない。

中心　棟は大刀は小肉がつき、脇差、短刀は角棟である。先は栗尻、剣形、片山形で、鑢目は横か、筋違い、勝手上がり、勝手下がりである。

銘　多くは長銘に切っている。最も特色とするのは、刀は殆んど太刀銘に切り、脇差、短刀は刀銘に切っていることである。

①初代忠吉（武蔵大掾忠広）

初代忠吉は、竜造寺家の抱工であった橋本道弘の子として、元亀3年（1572）に生れ、新左衛門尉といった。

慶長元年（1596）忠吉24才の時京都にでて、埋忠明寿の門に入り、慶長3年（1598、26才）佐賀に帰り藩主鍋島勝茂の知遇を得て、長瀬町で鍋島家の抱工として作刀にあたった。元和10年（寛永元年、1624、53才）再び上京し武蔵大掾を受領、名を忠広と改め姓を藤原とした。

寛永9年（1632）8月15日、61才で没した。墓地は佐賀市真覚寺にある。

（初代忠吉の作刀）

現存する作刀の最も古い年紀のものは、慶長5年の銘で、これから14～15年までの銘は堅に詰っていて、一般に秀岸銘といわれている。

それ以降は、堅に長くのびた書体となりさらに慶長20年頃からは、「肥前国住人忠吉作」と銘するようになる。前者を一般に「五字忠吉」後者を「住人忠吉」と呼んでいる。

また、元和10年（寛永元年）武蔵大掾を受領してからは、一般に武蔵大掾の銘を入れるが、肥前国住藤原忠広と銘した「献上銘」もある。

忠吉の作風は、一般に地鉄が小杢目で、地肌がつんで冴えており、刃文は中直刃が多く匂できで、小沸えがからんだものが多くみられる。彫物は自身彫はなく、宗長、吉長の施彫が多くみごとである。

②2代忠広（近江大掾忠広）

2代忠広は、慶長19年（1614）初代忠吉の嫡男として生れ、橋本平作郎と称したが、のち新左衛門尉と改めた。寛永9年父に死別し忠広を襲名、僅か19才で作品を世に出した。寛永18年（1641）、近江大掾を受領（28才）、生涯忠吉をなのらず元禄6年（1693）80才で没した。銘は初め肥前国住藤原忠広と切り、寛永18年以降は、近江大掾忠広と切っている。作風は幾分やさしく上品で一般に伝統的な小杢目肌の最もよくつんだ地鉄で、精美な点では肥前随一である。刃文は直刃、丁子刃、のたれ刃などいろいろある。長寿であったためその作刀数は一番多いといわれる。墓は二代以下佐賀市八戸町の長安寺にあ

る。

③3代忠吉（陸奥守忠吉）

3代忠吉は、寛永14年（1637）2代忠広の嫡男として生れ、新三郎と称した。万治3年（1660）陸奥大掾を受領（24才）、寛文元年（1661）陸奥守に転じた（25才）。貞享3年（1687）父に先立って50才で没した。作風は2代忠吉に似ているが、地鉄の強さは肥前刀工中抜群といわれ刃文も冴えて潤気がある。一般に刃縁がややしまり、小沸で匂が盛んについた大乱刃や特殊な丁子刃などがある。銘は細目のタガネであるが、強い銘字である。年紀のあるのは少ない。

④4代忠吉（近江大掾忠吉）

4代忠吉は、寛文8年（1668）3代忠吉の嫡男として生れ、橋本源助といったが、父の没後は父の通称新三郎を襲名した。父が19才の時死亡したため、鍛刀は祖父に学びのち2代忠広の代作にもあたったといわれる。元禄13年（1700）近江大掾を受領した（33才）、延享4年（1747）80才で没した。作風は、2、3代に似ているが、地鉄は小杢目がよくつみ、地沸は特にこまかについて精美である。一般に直刃が多い。また刀身の彫物は忠長のものが多い。

⑤5代忠吉（近江守忠吉）

5代忠吉は、元禄9年（1696）4代忠吉の嫡男として生れ新左衛門と称した。父が長命であったので部屋住いが長くが長く、父の存命中は肥前国忠広と銘じた。寛永3年（1750）近江守を受領（55才）忠吉を襲名した。安永4年（1775）80才で没した。作風は4代同様であるが、刀姿はやや細身で切先はのび心、踏張りに弱さを感じられる。直刃が多い。地鉄は細かく美しいが、強さに乏しい。銘は肥前国近江守忠吉と切ったのが多い。

⑥6代忠吉（近江守忠吉）

6代忠吉は、元文元年（1736）5代忠吉の嫡男として生れ新左衛門と称した。5代忠吉と同様父の存命中は、肥前国忠広と銘じ、父の死後寛政2年（1790）近江守を受領（55才）、忠吉を襲名した。文化12年（1815）80才で没した。

作風は5代同様である。銘も5代忠吉と同じ近江守忠吉で、両工酷似して判別しがたいといわれる。一般に吉や廣の口および田の第一画を5代と反対に下から逆に切っている。

⑦7代忠広

7代忠広は、橋本家系図によると、6代忠吉の嫡男で、はじめ平助と称しのち忠左衛門に改めた。近江大掾を受領したといわれるが、確かでない。文化13年（1816）2月28日没している。6代忠吉の死後84日目である。

刃銘は忠広で忠吉を襲名していないので、部屋住中に死去したと思われる。

6代忠吉との合作刀からその銘字ぶりがわかるが、7代の作刀はきわめて少ないといわれている。

⑧8代忠吉

8代忠吉は、古川与兵衛道弘の2男として享和元年（1801）生れ、7代忠吉の養子となり幼名を舜一郎、中ごろ新左衛門、のち内蔵允と称した。多芸多才で、剣術、軍学、俳諧、茶道などもよくし、手明鑓格として鋳立方で反射炉を築き大砲の鋳造にも貢献した。鍋島藩主閑叟公の側近として殉死した古川松根は、実弟である。安政6年（1859）59才で没した。

作風は、一般に身幅があり、匂がしまった中直刃で、小杢目のつんだ梨子風の地鉄である。忠吉家中興の主といわれている。

⑨9代忠吉

9代忠吉は、天保3年（1832）8代忠吉の嫡男として生れ百太郎と称し、のち明治になって春平と改めた。家業を相続しかたわら書をよくした。明治4年（40才）まで作刀したが、廃刀令で廃業した。明治13年（1880）49才で没した。刀銘は、はじめ忠広、安政6年（1859）28才父の死後忠吉を襲名した。

作風は、一般に幅広の造込みで、小杢目がこまかにつんだ無地風の地鉄で、直刃が多く匂がしまっている。銘字に年紀が少ないので8代と混同され易い。

⑩土佐守忠吉

初代忠吉の門人で謎の多い刀工である。忠吉が武蔵大掾を受領すると、忠吉銘をゆずり受けたといわれ、晩年土佐守を受領。生没年不詳。1代説と2代説がある。同時代の刀工にくらべ異色の存在で、肥前一般の作柄とは一風異にしている。寛永5年紀の作品がある。

⑪初代吉房

吉房は初代忠吉の門人で、茂右衛門と称した。忠吉の晩年には、師を助け、続いて2代忠広にも協力したといわれる。

初銘は忠房。生没年不詳。銘に「源吉房」「肥前国佐賀住源吉房」などがある。年紀のあるものに、寛永10年（1633）のものがある。

⑫初代吉長

初代忠吉の門人で宗長の子又は弟子吉房の次男ともいわれ、出生に諸説がある。新兵衛と称し、初銘は吉行。特に彫物が上手である。「肥前国吉長」「肥前国佐賀住藤原吉長」「切物藤原吉長」の銘字がある。

寛永（1633前後）ごろの人である。5代の武右衛門（享保元年1716）まで続いている。

⑬肥前国吉信

吉信は、初代忠吉の娘婿で、弥七兵衛と称した。正広、行広の父で、寛永10年（1633）46才で没したといわれている。一般に小杢目がよくつみ丁子刃が上手とされている。初代忠吉の影の人として働き、よき協力者であったため自身作は少ない。

⑭初代正広（河内大掾正広）

吉信の嫡男で、慶長12年（1607）生れ、左伝次郎と称

した。初銘を正永と切った。17才の時自作の太刀を藩主鍋島勝茂に献上しのち正広の銘をもらい、寛永5年（1628）河内大掾を受領（22才）、寛文5年（1665）59才で没した。乱刃を得意とし、忠吉本家筋に劣らない名工である。代々藩のお抱工として栄え、刀工としては11代まで続きその子孫は現在に及んでいる。

⑮2代正広（河内守正広）

初代正広の嫡男で寛永4年（1627）生れ、佐伝次郎と称した。初銘は正永、万治3年（1660）武蔵大掾を受領（34才）。寛文元年（1661、33才）武蔵守に転じ、同5年（1665）河内守に転じ、正広を襲名した。元禄12年（1699）73才で没した。父に似て乱刃をよくし父に劣らぬ上手で名品を多く残している。

⑯9代正広

8代正広の弟で、左伝次または伝作と称した。河内大掾を受領したとの説もある。藩の御用を務めていたが、嘉永6年2月（1853）没した。正広一門は乱刃を得意としている。

⑰初代行広

橋本吉信の次男（初代正広の弟）で九郎兵衛と称した。正保5年（1648）出羽大掾寛永3年出羽守に転じた。天保3年（1683）66才で没した。慶安3年（1650）オランダ鍛えを学び、銘にも「以阿蘭陀鍛作之」が多い。

作風も兄正広に似て身幅があり、小杢目の地鉄で乱刃が多く上手である。

⑱2代行広

初代行広の嫡男で、藤馬丞と称した。初銘行永、貞享元年（1684）出羽大掾のち出羽守を受領。元禄14年（1701）69才で没したといわれる。

作風は、初代行広、2代忠国に似ている。

⑲初代行清

2代行広の次男で、弥五郎と称した。宝永（1707年前後）ごろの人である。

なお、行清の子孫は、慶応まで6代続いている。

⑳国広

初代忠吉の門人で義弟の相右衛門広貞の長男、橋本六郎左衛門と称した。元和ごろから正保ごろ（1645年前後）の人で、85才で死亡したといわれる。初代大和大掾兼広の父で、初代忠国（播磨大掾）の兄にあたる。

㉑初代兼広

橋本六郎左衛門国広の次男で、六郎兵衛または勘左衛門と称し、寛文7年（1667）大和大掾を受領、のち大和守に転じた。宝永2年（1705）77才で没したといわれる。

㉒2代兼広

初代忠吉の義弟にあたる広貞の子供で、初代兼広の養子になったといわれる。初め相右衛門のち平次兵衛と称し、元禄11年（1698）遠江守を受領。鍋島弥平左衛門嘉就のお抱となって佐賀城下に住んでいた。没年は不詳。

㉓2代広貞

初代兼広（大和大掾）の子で、広貞の2代を継いだ。相右衛門と称し、寛文12年（1672）信濃大掾を受領。元禄13年（1700）77才で没したといわれる。

なお、広貞一門は、享保ごろ（1725年前後）まで4代続いている。

㉔広定

広定の出生については多くの説がある。一般に、2代兼広の次男藤右衛門広貞の子供といわれ、通称甚右衛門と称した。享保（1725年前後）ごろの人である。銘には「肥前国藤原広定」「肥前国住広定」。「以真鍛作之」の添え銘のあるのが多い。

㉕初代忠国（播磨大掾忠国）

初代広貞（初代忠吉の義弟）の次男で、慶長3年（1598）生れ、橋本六郎左衛門と称した。初銘は広則と切った。寛永11年（1634）播磨大掾を受領（37才）、忠国と改名し小城藩のお抱工となった。晩年入道して休鉄と号した。元禄4年（1691）94才で没した。乱刃が上手である。

㉖2代忠国（播磨守忠国）

初代忠国の子で、弾左衛門と称し、初銘は治国、父隠居後忠国を襲名。明暦元年（1655）上総大掾を受領、天和年間（1682年前後）播磨守に転じたといわれる。2、3代ともに中心に抱き牡丹、16葉菊文を切ったのがあり、年紀のあるのは少ない。

㉗初代宗平

初代広貞の4男で与兵衛と称した。初め上総大掾、のち佐渡大掾を受領。寛文（1666年前後）ごろの人である。銘に「肥前国上総大掾藤原宗平」「佐渡掾藤原宗平」「肥前佐賀住佐渡大掾藤原宗平」などがある。

㉘初代宗次

宗次は高木瀬町長瀬の住人で、のち城下長瀬町に移住し、藩主の抱工となり知行を受けた。慶長11年（1606）伊予掾を受領。同時に掾司頭を拝命。寛永9年（1632）ごろ没したといわれる。新刀の宗次一門の祖であると同時に肥前新刀の開祭は宗次からといわれている。忠吉との関係は明かでないが忠吉よりも先輩のようである。

古刀に似た作風で、相州風が強く肥前刀の中では異色の作風をみせており初代忠吉に劣らぬすぐれた名刀を残している。宗次一家は刀工として8代まで続きその子孫はなお現在に及んでいる。

㉙2代宗次（源正次）

2代宗次は、初代の嫡男で林十郎のち内蔵丞と称した。初銘は正次と切った。寛永9年（1632）藩主勝茂から宗安の名を授けられたといわれる。のち宗次を襲名した。伊予掾を受領。貞享元年（1684）ごろ没した。父に劣らぬ上手である。

「源宗次」「肥前国住伊予掾源宗次」などの銘刀がある。

㉚3代宗次

五郎太夫のち左馬之丞といい、初銘は宗正と切った。

元禄7年（1694）諫早家に召抱えられ、享保3年（1718）諫早に移住。享保8年（1723）ごろ没したといわれる。左ぎきのため中心の鎬目が逆筋違いになっているのが特色で、乱れ刃を得意とした。

㉛8代宗次

7代宗次の嫡男で、はじめ半之助、のち繁之助と称した。嘉永4年（1851）18才の時、諫早から佐賀に出て修業にあたった。

藩主直正と関係の深い古川松根とも親交があった。この短刀は松根のために造ったもので、拵は古川松根の作である。明治43年（1910）77才で没した。

㉜肥前国吉包

佐賀郡本庄村鹿ノ子（現、本庄町）の三ヶ嶋久米右衛門の長男で、母方の実家を継いで、野方作大夫または作太夫と称した。8代忠吉家に入門。明治15年（1882）56才で没した。

展示中の刀は、明治元年（1868）江藤新平からの注文によるもので「武蔵野爾繁留草薬乎払以筒」「君賀行幸越荷曽嬉気　実美公」と三条実美の和歌を彫ったものである。

㉝2代本行

初代本行は、延宝5年（1677）頃（時の唐津城主　大久保加賀守　忠朝）豊後高田より唐津へ移住相州綱広に入門しており、一般に松葉本行といわれている。

2代本行は、初代の嫡男で、新五左衛門と称し、初名は泰行、のち本行を襲名し河内守と称した。没年は不詳。享保、元文（1716～1736）頃の人である。

㉞正景

銘鑑もれになっている刀工で、文化年間（1810年前後）唐津で作刀している。生没ともに不詳。

（付）肥前の鐔

藩政時代、肥前国でつくられた鐔を一般に肥前鐔と呼んでいる。佐賀城下では鐔工として独立した専門家が少なく、刀工や甲冑師の宮田系による鐔が多い。しかし幕末には吉村一啓などの金工家も生れた。また須古には肉彫を主とした釘本弥左衛門や向井吉兵衛などがいた。唐津には伊東派の正勝、正国などの糸透しの鐔がある。長崎では、千匹猿で有名な光広系、一種異国情緒をもつ平戸の国重系、布目象嵌を得意とした若芝系及び無銘の南蛮鐔などが有名で各々独得な持ち味をしめしている。

この稿は「肥前の刀と鐔」（福永酔剣、寺田頼助共著）及び「肥前刀思考」（片岡銀作著）を参考にし、板谷憲道、浜野四郎氏のご高教をうけたもので、初心者の肥前刀鑑賞の手引きとなれば幸いである。

（資料係長　尾形善郎）

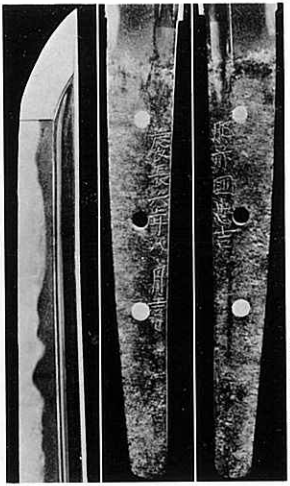
藩主勝茂より初代正広へ与えられた屋敷扶助伏

烏森神社奉納の神剣鍛刀場に設けられた定書

2代正広の受領口宣案

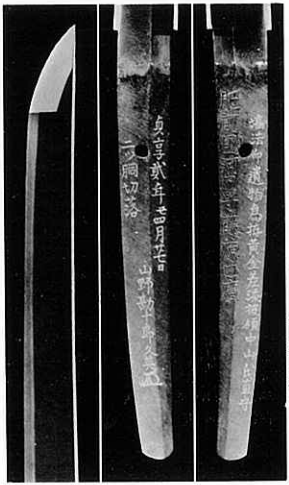
御城二而細工仕候次第（天和二年御前打ち覚書）

同上（続）

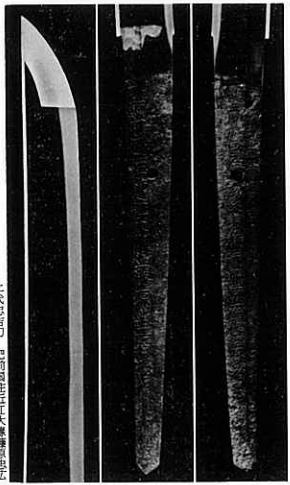


初代忠吉刀　肥前国忠吉
慶長六年八月吉日・長さ六九㎝

初代忠吉　短刀
肥前国住藤原忠廣
寛永八月日　長さ二九・六㎝



河内守正広刀
肥前国河内守藤原正廣（別に金銘）
長さ七五・二㎝



二代忠吉刀　肥前国住近江大掾藤原忠広
万治元年八月吉日
願主肥前国住多々美作守藤原茂成室氏女
長さ七二・二㎝

肥前刀工系図

●忠吉系図（佐賀）

- ※忠吉の祖父 吉信（金和）
  - 1 行広（貞永）※出羽守
    - 1 行清（貞永）※出羽守 — 2 行清（65歳～続く）
    - 2 行広（貞享）※出羽守
      - 3 行広（宝永）※出羽守 — 以下明治まで代々続く
  - 1 ※初代大隅 正広（文永）
    - 1 広住（正徳）
    - 2 広住（享保）
  - 2 正広（延宝）※初代大隅
    - 3 正光（貞享）※初代大隅
      - 4 正広（宝永）※初代大隅
        - 5 正広（享和）※初代守
          - 6 正広（寛政）— 7 正広（享和）※出羽守 — 8 正広（文政）— 9 正広（天保）※出羽守 — 10 正広（明治）— 11 正広（明治）— 以下刀工なく現在に至る
  - 3 ※陸奥守 忠吉（寛文）— 4 忠吉（元禄）※近江守 — 5 忠吉（宝暦）※近江守 — 6 忠吉（寛政）— 7 忠廣（文化）— 8 忠吉（天保）※出羽守 — 9 忠吉（慶応）※一門人吉信
- ※近江大掾 忠長（寛永）
- ※左衛門 門人中吉（寛永）— 2 忠吉（正徳）※肥前

※武蔵大掾 忠吉（慶長）

- 門人長吉（寛永）— 2 吉長（元禄）— 3 吉長（天和）— 4 吉長（元禄）— 5 吉永（宝永）
- 門人一吉房（寛永）— 2 吉房（享保）
- 門人吉沢（寛永）
- 門人宗長
  - 1 ※佐渡大掾 宗中（寛文）— 2 宗中（正徳）
  - 1 中国（寛文）※播磨大掾
    - 2 中国（貞享）※播磨守 — 3 中国（元禄）※播磨大掾 — 4 中国（享保）※播磨大掾
  - 2 広貞（寛文）※ — 3 広貞（元禄）— 4 広貞（享保）
  - ※国広（元和）
    - 1 源広（寛文）※太和大掾
      - 2 源広（元禄）※遠江守 — 吉住 — 広良（享保）— 広光（享保）※
  - （一説門人）はじめ吉家
- 門人一吉長（寛永）※ — 2 吉長（元和）— 3 吉長（元和）— 4 吉長（元禄）— 5 吉永（宝永）
- 門人一吉房（寛永）— 2 吉房（享保）
- 門人吉貞（寛永）— 2 吉貞（慶安）— 3 吉貞（寛文）
- 門人一吉貞（寛永）— 2 吉貞（慶安）
- 門人一忠清（寛永）— 2 忠清（享文）— 忠宗（天和）— 忠宗（享保）
- 門人一忠正（寛永）— 2 忠正（天和）
- 綾部（寛永）門人一忠正（寛永）— 2 忠正（天和）
- 門人吉広（承応）— 2 吉広（元禄）
- 門人一吉貞（寛永）— 2 吉貞（慶安）— 3 吉貞（寛文）
- 門人吉沢（寛文）— 政国（明治）

●伊予掾宗次系図（佐賀1 諫早）

1 ※伊予掾 宗次（慶長）— 2 ※伊予掾 宗次（寛永）— 3 ※左馬之介 宗次（貞享）— 4 宗光（享保）— 5 宗清（安永）— 6 宗光（安永）— 7 宗次（天保）— 8 宗次※（元治）— 以下刀工なく現在に至る。

●本行系図（唐津）

1 本行（貞享）— 2 ※河内守 本行（享保）— 3 本行（宝暦）※能登守 — 以下刀工なく現在に至る。

●土井真了系図（平戸）

正関（寛永）— 1 真了（貞享）— 2 真了（享保）— 3 真了（宝暦）— 4 真了（寛政）— 5 真了（享保）— 6 真了（天保）? — 以下刀工なく現在に至る。

- 数字は何代目を示す
- ※は出張刀剣を示す
- （ ）の年は主たる作刀期を示す

参考文献
肥前刀剣書（共同研究）
肥前の刀と鐔（諫早郷土史・吉田義昭）

博物館日誌

1月4日　執務始め式
1月12日　「佐賀の自然・風土と植物写真展」開場（大展示室）
1月15日　常設展「成人の日」のため無料公開
1月19日　「佐賀の自然・風土と植物写真展」終了
植物友の会総会（大展示室）
1月25日　新遺跡資料展開場（大展示室）
1月28日　当館の設計者高橋　一氏来館
1月31日　ロビー拡張工事終了
京都大学教授乾由明氏、中里太郎右衛門氏来館
2月2日　佐賀大学茶道部45名茶室利用
2月5日　定期事務監査
忠南大学考古課長成周鐸氏、北九州市立資料館小田富士雄氏来館
2月8日　福岡県文化課松岡氏来館
2月9日　広島大学教授潮見浩氏来館
佐賀大学茶道部43名茶室利用
2月10日　肥前名刀展協力委員会（応接室）
2月12日　福岡市歴史資料館下条氏来館
2月13日　九州大学助教授西谷正助教授、慶北大学助教授　容鎮氏来館
2月14日　西海町婦人会42名「常設展」観覧のため来館
2月16日　平安博物館考古課長渡辺誠氏、九州産業大学教授森定次郎氏来館
2月19日　福岡市立歴史資料館長三島格氏来館

●行事お知らせ

修学旅行の計画に博物館の見学を折込んでください。

常設展			
佐賀県の歴史と文化展	12月7日～3月31日	大　人50（30） 大・高生30（20） 小・中生20（10）	佐賀県の地質時代から現代までの自然史資料や考古、歴史、美術工芸の資料を系統的に展示し、本県の歴史と文化の特質について一般の理解に資する。

企画展			
展覧会名	会期	観覧料 （）内は団体料金	備考
肥前名刀展	3月2日～3月23日	大　人 100（80） 大高生　50（40） 小中生　30（20）	刀剣は日本の長い歴史の中でさまざまな役割を果たしてきた。なかでも肥前刀は、忠吉一門によって多くの名刀を生み、刀剣史上その作風と作刀数に大きな位置をしめてきた。 当館では、忠吉を初めその門人がつくり出した名刀及び肥前鐔、小道具類を一堂に展覧し、刀剣のもつ意義と肥前刀の美術工芸史上における価値を再認識するために資する。

※肥前名刀展特別講演会　3月15日　13時30分～県立図書館講堂
講師（刀剣研究家）福永酔剣氏　　演題―「肥前の刀と鐔」

●新刊書案内

清水平一郎原著、川副博著
覆刻、佐賀県方言語典一斑の出版について。
かねて佐賀方言を研究されている当館の川副博先生が、明治36年清水平一郎著の佐賀県方言語典一斑を訂補覆刻出版されました。佐賀県方言の文法的な理解には必須なものです。A5版、208頁、頒価 350円（送料は別）申込みは当館へ。

博物館報	第 25 号
発行年月日	昭和50年3月1日
編集	大園　弘
発行	佐賀市城内一丁目15～23 佐賀県立博物館
印刷	合資会社　音成印刷所